２０１２年１１月１３日

２０１２年　ＩＳＡＦ年次総会　報告　（Draft）

JSAF 国際委員会
外洋担当副委員長　小林　昇

今年のＩＳＡＦ年次総会は、アイルランドのダブリンにて開催された。
私は、１１月４日から９日まで現地に滞在し、外洋関連の委員会や ORC の総会、夜のソーシャルプログラムに参加した。

ＩＳＡＦの会長が選任される今年の総会は、オリンピック種目にカイトセーリングかウインドサーフィンか？の議論と共に熱気を感じさせるものがあった。日本からは植松 眞副会長をはじめとして、新国際委員長の堤 智章氏、ウインドサーフィンの宮野 幹弘氏、計測委員会から角 晴彦氏が新たに参加され、従来の大谷、柴沼の各氏と小林に加えて前国際委員長の戸張房子氏が堤新委員長の紹介や引き継ぎと各委員の活動支援のために参加され、合計８名が総会に臨んだ。植松副会長、角氏と私は外洋系の各委員会と同時に開催される ORC の総会に出席した。　以下、私が出席した委員会の報告を致します。

１１月４日　エンピリカルハンディキャップサブコミッティー

参加委員も少なく、ニルス委員長（ノルウエイ）と、アメリカ、フランス、中国の委員が参加。
何時ものように特に大きな議題や報告は無かったが、フランスのダニエル委員から HN France という施行中のハンディキャップシステムに登録しようとする艇で、スタンダード艇リストに無く、どのカテゴリーにも当てはまらない艇は ORC のデーターを使って性能評価を行なって、レース結果のフィードバックを加えて調整を続けるシステムの紹介があった。また、以前から討議されて来た事項であるが、各国の簡易レーティングは計測数値の名称や標記がまちまちで他国の証書との比較検討も困難である事から、ISAF ウエッブサイトに夫々の標記項目の辞書的な対訳表を掲出する提案もなされた。それによって各国の情報交換の促進も期待される。
ニルス委員長（７５歳）も今回の任期満了での引退を表明された。

１１月５日　スペシャルレギュレーションサブコミッティー

本年８月、英国のファーストネットレースで発生した、<Rambler 100>という米国の１００フィートスーパーマキシのカンティングキールが脱落し１８０度の転覆状態になった。幸い２１名の乗員は全て救助され人的被害は無かったが、大きな衝撃を世界の外洋ヨット界に与えた。この事故に対する US Sailing のレポートは以下から入手可能。

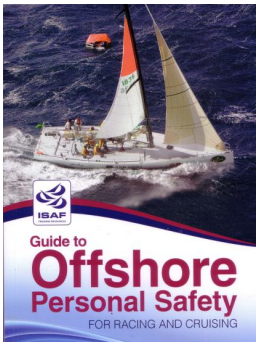
http://about.ussailing.org/AssetFactory.aspx?vid=16967（英文）

SR サブコミッティー、会議の様子

この事故の影響で、本年のサブミッションは復元力やキール強度、可動バラスト艇への規則、転覆した際の対処に関する事項などが多く提出された。又、サブミッションには従来にはあまり見られないキャップサイズやインバート等の文言が多く現れた。これらの幾つかはワーキングパーティー を設けて検討を続ける事となった。又、エレクトロニクスの進歩に応じた無線やレーダー、AIS、EPIRB、に関した討議も多く提出された。

特記すべきは、総会前に ISAF が ＜ISAF Guide to Offshore Personal Safety＞ という多くの写真や図版を

使って外洋での安全に付いて解説した１７０ページのハンドブックを発行した事で、実際の海難、遭難現場の写真が数多く掲載され、大変優れた内容となっている。この本をベースにパワーポイント版を作成し、外洋セフティーインストラクターセミナーの開催も検討中であるとの事。



＊　後日、ISAF の外洋担当サイモンフォーブス氏と日本語版作成に付いて話し合った。これはレーシングセーラーだけでは無く、クルージングセーラーにも有用な本であるので、実現を検討したい。（２部購入）

＊　５日夜は、ロレックスセーラーオブイヤー表彰ディナーが開催され、テレビのライブ中継もあって、長時間の表彰式であった。男子のベンアインズリー（英国）はシングルハンダーで４回目のゴールドを地元ロンドンで獲得する事でエルブストロームと並び、女子はこちらもシングルハンダーでゴールドを獲得したシューリュージャ（中国）が獲得し素晴らしいスピーチを披露した。

１１月６日　オフショアレーシングコングレスの年次総会

午前に、コングレスのみ出席の EGM,午後にオブザーバも参加できる AGM が開催された。植松副会長と私がどちらの会議にもコングレスとして出席した。

フィンチ会長からの２０１２年の活動報告は、証書発行数も維持され財政状態も良好であり、現行の性能予測プログラムは良く機能している事から、ORC の世界選手権も１５０隻の参加で盛大に開催され、ウエッブサイトを通じての各種サービスもより充実した、との報告があった。証書発行数は１１月初めで７、０００を越え、年度末には昨年の約７、２００に近づくようだ。やはりイタリア、オランダ、ドイツ、スペイン、ギリシャといった国が中心を占め、南米では一部支持されているが北米は壊滅的でやはり地中海と北部ヨーロッパが中心となっている。日本は、本年 ORC クラブ証書発行を無料とするサービスが ORC のサポートを受けて実施され、昨年の６１から７４になり、数的な崩壊に歯止めが懸かった状況であるが国内でのレースは実質的に開催されておらず、日本 ORC 協会は困難な状況となっている。２年連続で証書発行が１００を切る事で、本年にて共に任期満了となる日本のコングレス議席は２から１に減る事になる。２０１３年からのコングレス１名を選任する必要が出て来た。また、ORC 役員の改選も行われ満場一致でフィンチ会長以下、現執行部と各委員会メンバーの続投が決まった。

２年前から話題となっている、ORC と IRC を統合するユニバーサルルールへの模索は表面上何も決まらず具体的な動きも起っていないが、午後の AGM にて IRC のマークアーウィン氏と US セーリングのダンノーラン氏が二人で、ユニバーサルルールへ移行するために夫々のハンディキャップシステムに付いて技術的な比較検討を始めた事を発表。ORC の計測委員長であるニコラシニョリ氏と合わせて、手始めにセールに関して整合性を計って行くようだ。世界の外洋レースで大きな位置を占める米国が、この動きに加わった事は特筆すべき事であろう。総会終了後にアーウィン氏とシニョリ氏同時に個人的にインタビューしたが、その発表は文書で出される事は無く技術的な検討で我々はポリティカルな面からは離れている、という事であった。フィンチ氏も、共同で各々の証書発行を行う事務所の開設に付いてフランス協会と RORC の協議が成立しなかった事等で、実現できなかった事等、スケジュールの遅れを認めていた。統一ルールの実現はまだまだ先の事、というのが一般の状況であろう。

フィンチ会長は日本にテコ入れをする事を考えていて、＜必要なサポートの提案をしてくれ＞との申し出を

毎年受けるが、今年は＜日本に行って JSAF,ORCAN と３者で話し合う機会を持ちたいので調整して欲しい＞という話があった。私も素直な状況説明をしたが、JSAF と ORCAN は表面上フォーマライズされているが、成立時からの両者の溝が深い事を承知しているようであった。

＊　この会議前夜に恒例の ORC ディナーがダブリン市内のフォーシーズンホテルで開催され、植松副会長と共に出席した。

恒例の ORC ディナー、フィンチ会長のウイットに富んだスピーチが名物。

１１月７日　オセアニック＆オフショアコミッティー

私がコミッティーメンバーになっているこの会議は、エンピリカルとスペシャルレギュレーションのサブコミッティーを持つコミッティーであり、これらのサブコミッティーの報告やサブミッションへの討議を承認する他、ISAF 組織から出された外洋レースに関したレギュレーション変更や、サブミッションについての討議も行う。

近年のレース艇の大型化を受けて、RRS に全長３０．５m 以上の艇を相当数含むレースに対して NOR で適用が可能となるスパーヨットレーシングルールがアペンディックス SY として提案された事や、外部の援助に対する提案がレースルールコミッティーから出され、本委員会は承認した（最終はカウンシル決定による）。

レーティングシステムの報告は ORC と IRC からなされ、ORC については前述の総会報告に加え計測方法に付いて IRC と同様の空荷による水上計側に変える事が報告されたが、これも UMS を考慮した方向を感じさせた。IRC の報告では、８月末時点での証書発行数は昨年の約９２％である５、６７５であった。これは新しい国での伸張が見られるものの、世界的な不況の影響と従来メジャーな国での発行数減少が響いているようだ。日本は前年度から１４伸ばして２７７となり、世界で８番目の位置を確保している。

その他は、

＊スワン６０と J-１１１が新たに ISAF の認定のワンデザインクラスとして承認された。

＊本年の主だったヨットの事故報告があり、復元力の不足や可動キール脱落などの原因が注目されていた。

やはり今年で退任を表明しているジャックリーン委員長（フランス）は、在任中にボルボオーシャンやオープン６０等の人気のあるオセアニックレースのオーガナイザーと ISAF との連絡機関の創設と運用を軌道に乗せる功績があった。

＊　4 年任期の委員会活動の終わりに、委員長提案にてロイヤルアイリッシュヨットクラブで会議終了後に会食が催され、これに出席し交流を深めた。

右から二人目がリーン委員長

今回のノベンバーミーティングには外洋関係者として、計測委員会（IRC 担当）の角 晴彦氏の参加を得られた事で、外洋から３名の参加となり日本の存在感を高められた。今後も出来るだけ多くの関係者がまずはオブザーバーで参加し、積極的にコミッティーメンバーとなるように願う。

以　　上